

国立国語研究所蔵『絶句抄』について

古田, 龍啓
九州大学 : 学術研究員

<https://doi.org/10.15017/7325743>

出版情報 : 語文研究. 136, pp.61-78, 2023-12-04. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :



国立国語研究所蔵『絶句抄』について

古 田 龍 啓

一. 問題の所在

南宋の周弼が編んだ漢詩集『三体詩』は、室町時代に漢詩学習のための初学書として広く読まれ、五山僧による講義が行われた。増註本『三体詩』の七言絶句を注する抄物も数多く作製され、漢籍集部において最も多くの種類の資料が伝存している（柳田二〇〇四）。

本稿で取り上げる人間文化研究機構国立国語研究所蔵『絶句抄』（以下、国語研本）も、三体詩抄の一つである。国語研本は、簡便な書誌とともに、二〇一七年、カラー画像が国語研のウェブサイトで公開された。しかし、集部を原典とする抄物の目録である柳田（二〇〇四）に載っておらず、取り上

げる先行研究も存在しない。

そこで、本稿は、国語研本の素性を詳らかにし、言語資料として活用することを目指す。以下、次の順で議論を進める。まず二節で国語研本の書誌的事項、三節で国語研本の構成を示す。次いで、四節で先行抄との継承関係を解明し、国語研本の成立の経緯について考察する。最後に、五節で先行抄と共通する本文に見つかる異同に着目し、国語研本の日本語史資料としての有用性を示す。調査対象は、実見した原本、ならびに、公開されたカラー画像である。

二. 国語研本の書誌的事項

まず、国語研本の受け入れの経緯や書誌的事項について確

認する。

国語研図書室によれば、国語研本は、東京の古書店・一誠堂書店から購入し、一九五五年六月に受け入れたものである。^(注1) 帙の題簽に「三体詩鈔 片仮名鈔 富岡鉄斎旧蔵 三冊」と記されており、画家で蔵書家としても知られる富岡鉄斎（一八三六―一九二四）の蔵書であったことが分かる。

鉄斎がかつて本書を所持していたことは、『富岡文庫御蔵書第二回入札目録』（昭和一四年「一九三九」三月入札、以下『入札目録』）からも裏付けられる。『入札目録』三八五番に、後述する国語研本の特徴と一致する「三体詩抄 写三冊」「カナ古抄本 元和九年奥書あり」の記載がある。

国語研本は、長らく国語研に所蔵されながら、日本語史資料としては看過されてきたことになる。

次に、原本調査に基づき、主要な書誌的事項を(1)に示す。先んじて国語研のサイトで紹介されている項目には、右肩に*を付した。書き入れの詳細、識語や蔵書印については、別途、取り上げる。

(1) *全三卷（上・中・下）三冊 袋綴 本文一筆

【*請求記号】W五二―一六／SA六七／一―三

【寸法】縦二五^{セシ}×横一一^{セシ}

【表紙】原装栗皮表紙 【料紙】楮紙 【行数】半葉一二行
【*外題】第一冊は表紙左側に打ち付け書きで、「上 絶句抄」と墨書。第二、第三冊は「上」に替わり、それぞれ「中」「下」

【*内題】増註唐賢絶句三体詩法（上・3才）

【尾題】三体増註抄（下巻末）

【丁数（墨付）】上巻八七丁、中巻八三丁、下巻九九丁^(注2)

【書写年代】近世初期

【書き入れ】人名・地名・書名の朱引、墨・朱の補入や異

本注記などあり

識語は、各巻末に、「三ノ内乾徳寺／紙数八十四丁」（上・86ウ）／は改行、紙数は中巻「八十二丁」、下巻「百丁」とある。また、巻末遊紙や裏表紙見返しに、本文とは別筆で、「三巻之裏／松寿什物／現住单杜多手記焉」（上・巻末遊紙オ、中・下は「单杜多」ではなく「单頭陀」）、「慈眼常住／三ヶ之内」（上・巻末遊紙ウ^(注3)）などと記されている。

蔵書印は、各巻末の識語「松寿什物」の上に、单边方形陽刻「慈眼常住」（上・巻末遊紙オなど）の朱印が押されている。同じものが、第一首「華清宮」の注釈が始まる上・6ウにもある。

識語や蔵書印には、寺院名「乾徳寺」、当該敷設の備品であることを示す「松寿什物」「慈眼常住」、僧名を表す「単杜多(單頭陀)」といった固有名詞が確認できる。はじめに、これらが指し示すと考えられるものを(2)にまとめ、以下、説明を加えていく。

(2) a 乾徳寺：現在、名古屋市瑞穂区に位置する臨済宗妙心寺派の寺院。文禄二年（一五九三）開創

b 松寿(什物)：松寿亭(愛知県春日井市、現存せず)

c 慈眼(常住)：黄檗宗・慈眼寺(愛知県春日井市)

d 單頭陀：單伝元指(？)一七二八、天和二年「二六八

二」嗣法)。越伝道付(二六一六―一六八三

の弟子で、慈眼寺を再興し、住職を務める

識語「単杜多手記焉」を基に、国語研本の書写者を単伝元指と推測したが、本書の成立の経緯を押さえるために、単伝の師である越伝道付の事績を確認することから始めたい。

越伝の弟子・無関元晃(生没年不詳、延宝六年「二六七八」嗣法)が編んだ『越伝禅師慈眼禅寺語録』(貞享三年「二六八六」刊)「行由」によると、越伝は、元和二年(一六二六)、尾張に生まれる。乾徳寺の三霊紹省に学び、寛永一九年(一

六四二)、乾徳寺の住持となり、正保四年(二六四七)には、妙心寺第一座も務めている。その後、日本黄檗宗の祖・隠元に謁見し、寛文一二年(一六七二)に慈眼寺の開祖となり、天和三年(一六八三)に示寂している。妙心寺で千人を超える聴講者に『伝心法要』の講義を行うなど、優れた学僧であつたらしい。越伝の経歴には、識語に現れる「乾徳寺」、蔵書印「慈眼常住」との関わりが窺える「慈眼寺」の名が見える。

他方、越伝の弟子・単伝の出生地や出生年は不明で、その行状について、明らかにできていることは少ない。^(注6)『東春日井郡誌』所収の「春日井郡上條新田紫金山慈眼寺古記録」(以下、「慈眼寺古記録」)^(注8)によると、越伝の死後、慈眼寺はその弟子・無関が継ぐが、無関もほどなくして亡くなる。そのため、「慈眼寺、長寿寺共無住に相成、越伝弟子単伝、天桂兩人御座候得共、若年に而大寺の住職相勤かたく」、慈眼寺は元禄二年(一六八九)に廃絶する。しかし、(3)に示すように、宝永六年(一七〇九)、慈眼寺は単伝の申請により越伝の通所・松寿亭に再興される。^(注8)「松寿什物」の「松寿」は、慈眼寺再興の地となった松寿亭を指すと考えられる。

(3) 幸ひ右越伝通所、春日井郡上條新田の内松寿亭と申庵有之、宝永六丑年右庵へ知多郡須佐村、正衆寺控正覺寺を

申請、一寺建立仕度之旨奉^レ願候処、单伝志の程奇特に被^二思召^一、…中略…紫金山慈眼寺と申寺号、右正覚寺御引替へに相成、以前之通慈眼寺と改号被^二仰付^一

(慈眼寺古記録)

国語研本の書写の経緯や所蔵先の変更は、次のようにまとめることができるだろう。まず、乾徳寺において单伝によって書写されたため、卷末の識語に「乾徳寺」と記された。その後、越伝の通所であつた松寿亭所蔵の「松寿什物」となり、新たにその旨が、別人によって書き加えられ、最終的に、松寿亭が慈眼寺に改められたことで、識語「松寿什物」の上に「慈眼常住」の朱印が押された。

このように解釈すると、識語や蔵書印に見える「乾徳寺」「松寿什物」「慈眼常住」「単頭陀」を統一的に説明することができる。

また、春日井市教育委員会事務局（一九九八）によれば、慈眼寺に残る「本造聖観世音菩薩坐像」の背・像底には、国語研本の識語「松寿什物／現住单杜多手記焉」に類似する「弘法大師作 松寿什物現住单伝求焉」の墨書きがある。この事実からも、(2)の推定は裏付けられる。後述する先行抄との関係とも矛盾しない。

問題として残るのは、国語研本の書写年である。(1)では、「近世初期写」と推定したが、国語研のサイトは「一六二三」「元和九」年以前写」とする。国語研が示す推定年は、下巻の裏見返しに記された(4)の割注部に見える「元和九年」に基づくと考えられる。

(4) 此集ヲ始テ講スルハ、妙喜庵ノ祖・中岩和尚入唐シテヨリノ事也。其後／相国普光院ノ祖・観中和尚入唐シテ日本ニ盛也。／宋理宗淳祐^{イッ}十年庚戌秋八月周弼成此集《至日本元和九年凡／三百七十一年カ》。

《内は割注、／は改行

国語研の解説は、大尾に現れる(4)に「元和九年」とあることを根拠に、(4)が一六二三年に記され、(4)より前に位置する本体部分は、それより前に書写されたと解釈しているようである。

本稿は、書写者を单伝元指とみるが、单伝書写説と「一六二三」「元和九」年以前写」という解釈は両立しない。单伝は、享保一三年（一七二八）に没しており、越伝（一六八三年没）に次いで、弟子の無関が亡くなった際、单伝が住職を務めるには「若年」であつたとする「慈眼寺古記録」を考慮に入れ

ると、一六二三年当時、単伝が生まれていたとは考えにくい
ためである。

そこで、まず、書写年の手がかりを国語研本の本文に求め
ると、(5)に示す記述が見つかる。(5) a では、天文三年（一五
三四）成立の『四河入海』の解釈が紹介されている。また、
(5) b には、「常庵和尚ノ講」とあり、常庵竜崇（一四七〇～一
五三六）の解釈が取り上げられている。芳賀（一九六〇）が
指摘するように、常庵は、天文元年（一五三二）に三条西邸
で三体詩の講義を行っている。

- (5) a 私ニ四河入海ニハ玉奴ハ誤トシタソ。（下・16才）
b 楓橋トハ橋ハ石シ橋ソ。楓ハ二三本アルソ。…中略
…此義ハ常庵和尚ノ講ソ。（上・21ウ、22才）

このように、本文から明らかにするのは、天文三年（一五
三四）以降に国語研本が成立したということだけである。

(4) の解釈を巡り、考慮すべきことは、国語研本の上巻・内
題の前に、『三体詩塩瀬宗和抄』（元和六年「一六二〇」刊。
以下、塩瀬宗和抄）、『三体詩素隠抄』（元和八年「一六二二」
刊。以下、素隠抄）と共通する本文が見つかることである。
異同を添えて、(6)に一部を掲げる（㊦が国語研本、㊧が塩瀬

宗和抄。訓点の異同は略す）。

- (6) a 詩法有^{ニハ}三十体^一。一起^{ニハ}于第一句^一、二起^{ニハ}于第二句^一、
三起^{ニハ}于第三句^一。伯弼力家法、是也。

㊦詩法——㊧又詩法
（国語研本・上・1才、素隠抄・卷一・三体絶句一・
8才）

- b 風・雅・頌ヲ三経トタテニシテ、賦・比・興ヲ緯ト
ヌキニシテ、布ナントヲリタ如クニシタ物ソ。サ
テ風二百五十一、雅二百十一、頌二十四有ソ。

㊦タテニシテ——㊧タテニシ、㊦緯——㊧三緯
（国語研本・上・2才、塩瀬宗和抄・序・2才）

下巻末に記された(4) (7) c に再掲）も、(7) a、b に示すよう
に、同文が塩瀬宗和抄に見つかる。(4) は、『入札目録』が述べ
るような「奥書」ではなく、先行抄に基づく書き入れである。

- (7) a 此集ヲ始テ講スルハ、妙喜庵ノ祖・中岩和尚入唐シ
テヨリノ事也。其後相国普光院ノ祖・観中和尚入唐
シテ日本ニ盛也。（塩瀬宗和抄・一・22ウ）
b 宋理宗淳祐十年庚戌秋八月周弼成此集。

(塩瀬宗和抄・一・23才)

c 此集ヲ始テ講スルハ、妙喜庵ノ祖・中岩和尚入唐シテヨリノ事也。其後相国普光院ノ祖・観中和和尚入唐シテ日本ニ盛也。宋理宗淳祐十年庚戌秋八月周弼成此集《至日本元和九年凡／三百七十一年カ》。

(国語研本・下・裏見返し)

割注で挿入された「元和九年」は塩瀬宗和抄にはなく、国語研本の書写者が、書き入れ時の年を新たに付け加えたとして解釈することもできる。しかし、書き入れの典拠となつたのが元和九年に転写された塩瀬宗和抄（もしくは(4)を有する別抄）で、典拠にある「元和九年」の記述をそのまま引いた可能性も否定できない。本稿では、「単杜多手記焉」という識語や単伝の没年を根拠に、「一六二三」「元和九」年以前写」という解釈は採らず、「書写者は単伝」、書写年は「近世初期」（一七世紀後半か）と結論づける。

三. 国語研本の構成

続いて、国語研本の構成を確認する。国語研本は、『三体詩』の七言絶句全一七四首の注釈を載せる。詩題だけではな

く、注釈対象である絶句全体も掲載しており、詩には訓点も付されている。(8)に示すように、まず詩題があり、詩題や作者に対する注釈が示される。次いで、作者や漢詩本文が掲げられ、漢詩の注釈文が示される。

(8) 懷二呉中馮秀才一 呉中トハ呉ト云フ用マテソ。中ハツ

ケ字ソ。杜牧在京師作ソ。秀才トハオアツテ不試ヲ云ソ。

杜牧 京ニテ作ソ。

長洲苑、外草蕭々

却算^{レハ}遊程一歳月遥^{ナリ}

只有二別時^{ノミ}一今不忘

暮煙^ノ秋雨過^{シコトヲ}楓橋^ヲ

長洲——長洲ハ呉ノ県名也。呉ハ周時ハ太伯ヲ封シタ処ソ。
(国語研本・中・43才、43ウ)

また、『三体詩』の講義や注釈を行つた五山僧・希世靈彦(村)、万里集九(梅)、惟肖得嚴(肖)らの解釈・訓法を示す傍注や注釈文も見つかる。たとえば、(8)の漢詩本文「今不忘^ス」には、「今不忘^{イマニスワスラレ}」との朱筆の右傍訓が「村・梅点」とともに記されており、さらに、左傍訓として、「今不忘^{ジスレ}」「肖点」の墨筆がある。

四・国語研本の本文——先行抄との関わりを中心に——

四・一・桃源抄（駒大本）との関係

次に、先行抄との継承関係という観点から考察したい。結論を先に述べると、国語研本は、五山僧・桃源瑞仙（一四三〇～一四八九）の三体詩抄（以下、桃源抄）とほぼ同一、もしくは、その改編・要約版と位置づけられる注釈文を中心に構成されている。

この事実を確認するために、まず、現在、所在が確認されている唯一の桃源抄である駒沢大学図書館蔵『三体唐詩絶句鈔』（以下、駒大本）との比較を試みたい。古田（二〇二二）で明らかにされているように、駒大本は、一韓智翹（生没年不詳）が明応元年（一四九二）に写した旨の識語を持つ一韓書写本の転写本であり、七言絶句一七四首中一二二首の注釈文を有する桃源抄の零本である。

駒大本の全一二二首について国語研本との対応関係を調べると、程度の差はあるが、すべての絶句に共通する内容が見え、桃源抄の本文が必要に応じて改められ、採用されていることが分かる。

(9) a は、傍線を付した「ソ」と「也」の相違、「詳」と「祥」、

「晦日」と「ヲウツゴモリノ日」という表記の異なりを除き、両本は等しい。(9) b は、傍線部の相違の他に、「坐ハ堂下ニ坐スル也」という独自部分（点線部）が国語研本にあるが、大部分が一致する。

また、(9) c に示すように、駒大本では、桃源が自説を述べる際に、「愚」という自称が用いられることがある。この場合、国語研本は桃源の説であることを明記せず、そのまま「愚カ心」と引いている。

(9) 国語研本		駒大本	
a	金吾——金吾ハ日本テハ左衛門ノカラ名 ^ソ 。注ニ詳也。除夜ハ晦日也。儼ハラニアライトヨムソ。	金吾——金吾ハ日本テハ左衛門ノカラ名也。注ニ祥也。除夜ハヲウツゴモリノ日也。儼ハラニアライトヨムソ。	(14ウ)
b	慈氏和尚ノヲセラル、ハ、坐 ^テ 吹笙ノ坐 ^テ 字妙也。坐ハ堂下ニ坐スル也。王建カ自愧ル心アリ。二百四十人ノ中ノ楽人ノ数ニ備テ、ケウ ^ク 坐ニ連テ笙ヲ吹イテ堂下ニ坐スルマデソ。	慈氏和尚ノヲウセラレタハ、坐吹笙ノ坐 ^テ 字妙ナソ。王建カ自愧心ナリ。二百四十人ノ中ノ楽人ノ数ニ備テ、キウ ^ク 坐ニ連テ笙ヲ吹マデソ。	(15オ)
c	愚カ心ナラハ、ナセニ白髪ニナラフソト云ヘハ	愚カ心ナラハ、ナセニ白髪ニナラウト云ヘハ	(31ウ)

その一方で、内容は等しいが、相違の目立つ例もある。「濃」の読み方を問題とする(10)は、いずれも、「レイ」「ホウ」両方

の音があることを説く点は共通するが、国語研本のみが、点線を付した天隠や希世(村)の説、万里(梅)が紹介する『方輿勝覧』(方ヨ)の引用を有する。棒線を付した後半部の文章も異なる。

(10) 国語研本	駒大本
澧^{ホウ} 兩説。天隱モ音礼^{上声}也。村云、音豊、數中反、水出扶風云々。梅謂、方ヨ卅、澧水在澧陽、南六十歩云々。澧水——兼テ友人カ雍陶ニヲシユルヤウハ、澧水橋カラシテ本ノ大道テハナウテ、西ノ方ヘ小路ノ斜ヲタツネテコヨト云ホトニ、サテ大道ニアラネハ、アナタコナタト、フミマヨイマハルホトニ、日タクルマテアルクノ。 (上・34オ)	澧水橋——澧水トヨマウト云イ、澧水トヨマウトモ云ソ。其ナラバ澧トカ、ウ□□カヨイ□云。トレテアラウスヤラ、トチテモアレソ。友人カ雍陶ニ約束シテヲシユルヤウハ、澧水橋カラシテ本ノ大道テハナウテ、四方ヘ小路ノ斜ヲタツネテコヨト云ホトニ、エリノト尋ルホトニ、日ノタクルマテ尋レトモ、マタ、ツネエス。 (16ウ、□は虫損)

さらに、駒大本に掲載されていない五四首について、諸僧の解釈を集成する清家文庫蔵三体詩抄(以下、清家文庫本)に掲載された桃源抄の引用に依拠し比較を試みると、一〇〇例中七八例が国語研本にみつかる。(11)に示すように、駒大本が欠く後半部についても、桃源抄との継承関係が認められる。

(11) 国語研本	清家文庫本
a 從弟ト云ハ、イトコトシソ。其中 デ我ヨリ弟ヲハ從弟ト云イ、我ヨリ 兄ヲハ從兄ト云ソ。略ニ云ソ。 懇ニ云ニハ、從父兄弟ト云ソ。 (下・67ウ) b 此詩ハ、前ノ黃陵廟詩ノ後ニ作耶。 古今未詳之詩也。愚者少リシ時、 一二ノ講ヲ聞タレトモ、其說不分 明。 (下・9ウ、10オ)	桃云、從弟ト云ハ、イトコトシソ。 其中テ我ヨリ弟ヲハ從弟ト云イ、 我ヨリ兄ヲハ從兄ト云ソ。イトコト シヲハ從兄弟ト云ソ。略ニ云ソ。 懇ニ云ニハ從父兄弟ト云ソ。 (三・78ウ) 桃云、此詩ハ、前ノ黃陵廟詩ノ後 ニ作耶。古今未詳之詩也。愚者少 リシ時、一二ノ講ヲ聞タレトモ、 其說不分明。 (三・42オ)

また、古田(二〇二一)では、抄物研究史において、いち早く桃源抄を取り上げた新村出(一八七六—一九六七)が依拠したのが、相国寺に伝存した「桃源自筆」とされる本であったこと、雑誌『芸文』第壹年第二号(一九一〇)の「彙報」覧「新刊書批評紹介」に載る『諺語大辞典(藤井乙男氏編)』に関する新村が著したとみられる匿名「S」の論考に、「桃源自筆本」からの引用があり、当該の引用文が、国語研本に見つかることが指摘されている。四つの引用例について、両者の対応関係を(12)に示すと、「トカモナキ」「トガナキ」といった差異は認められるものの、すべてが国語研本で確認できる。管見の限り、すべての引用例が見つかる三体詩抄は、集成抄も含め国語研本のみであり、桃源抄との近さが窺われる。

(12)

国語研本

匿名「S」の引用

a	メト、酔タレトモ酒ノ酔イ本性ヲ 不レ忘ト云テ意ハチツトモ不 _レ 迷 ソ。 (上・18才)	メト、酔タレドモ酒ノ酔イ本性ヲ 不 _レ 忘ト云テ意ハチツトモ不 _レ 迷ソ
b	トカモナキ枕ガナケラル、ト云ヤ ウニソ戯テ愁ノ心ヲウツス也。 (上・33才、ウ)	トガナキ枕ガナケラル、ト云ヤウ ニシテ戯テ愁ノ心ヲウツスナリ
c	公道ノ世間ト云タモ、グリハマ ハマグリホトノコトソ。サノミチ カイハナイソ。 (上・36ウ)	グリハマ、ハマグリホドノコトゾ、 サノミチガイハナイゾ
d	恋ノ心ナレハイワレモナイ無情ノ 水ヲ怨ソ。待テヨリリアラネハ、 トガモナキ枕ガナケラル、ト云ヤ ウナソ。 (下・11ウ)	恋ノ心ナレバイワレモナイ無情ノ 水ヲ怨ゾ、待テヨリリアラネバ、各 モナキ枕ガナケラル、ト云ヤウニ ゾ

以上の事実から、国語研本が、桃源抄の強い影響下で作製されたことがわかる。

四、二・素隠抄（刊本・写本）との関係

桃源抄の他に関連が認められる先行抄として、妙心寺派の僧・説心慈宣（？）一六二六の著した素隠抄がある。谷沢（一九七七）などが指摘するように、素隠抄も桃源抄の影響下にある。すでに(6)aに一部を示したが、国語研本・上巻の内題の前に位置する1オ→1ウ、2ウは、素隠抄・巻一・三体詩起からの引用で構成されている。さらに、多少の相違はあるが、

国語研本の全一七四首のうち一五六首に、素隠抄からの引用と考えられる風・雅・頌の六義に関する書き入れがある（素は、素隠抄）。

(12) 此詩ハ変小雅ノ体ソ。全篇賦ソ。 ① 此詩——② 此ノ詩

(国語研本・下・1ウ欄外、素隠抄・三・38才)

(13) に掲げるように、両者には、本文にも類似点がある。(13)aは、傍線部を除き、両者は一致する。心田清播（一三七五→一四四七）の解釈を示す(13)bは、言い回しは異なるが、内容等はしい。

(13)	国語研本	素隠抄
a	九淵和尚入唐ノ時、寒山寺ヘワサ ト行テ見タト語ラシモフソ。楓橋 トハ橋ハ石シ橋ソ。楓ハ二三本ア ルソ。楓橋寺ノ中ニ太平寺ト云ガ アル。ソコニ般若函ノアルヲ見タ レハ封橋常住ト書付タソ。然レハ 昔ハ封橋寺ナルヲ後ニ楓橋寺トバ シ云タカ。 (上・21ウ)	九淵和尚入唐ノ時ニ、寒山寺ヘワ ザト行テ見タトテ語ラシガ、楓 橋ノ橋ハ石橋也。楓ハ二三本アリ。 楓橋寺ノ内ニ太平寺ト云ガアル ソ。ソノ寺ニ般若函ノアルヲ見タ レバ封橋常住ト書付タソ。然レハ 昔ハ封橋寺ナルヲ後ニ楓橋寺ト バシ云タカ。 (一・25ウ)
b	奉帚ハ心田云、奉ハ供奉也。持帚 酒掃曰奉帚也。 (上・68ウ)	奉帚——心田ノ義ニ、奉ハ供奉 ソ。持 _テ 帚酒掃スルモノヲ奉帚ト 云ソ。 (二・4才)

ここで、両者が影響を受ける桃源抄の当該部分を確認すると、(13) a は、駒大本では「九洲和尚ハ寒山寺ヘサツト行テ見タト語ラレタソ」(11ウ)とあるのみで、相違が大きい。また、(13) b に示す心田の解釈は、駒大本にはない。等しく桃源抄を踏まえた部分だけでなく、踏襲していない部分においても、両者には類似が認められる。

これまで、刊本を比較対象として利用してきたが、素隠抄には、「清見寺節信和尚作也」という奥書を持つ写本(零本)がかつて存在したことを平泉(一九二六・三四四～三八〇)が紹介している。鈴木(一九八四・一四九～一五六)によれば、写本は「烏有に帰した」といい、現存しないが、平泉(一九二六)に断片的に引用されている。以下、平泉(一九二六)に引用される写本を「写本素隠抄」と呼び、「刊本素隠抄」と区別する。

注目されるのは、刊本にはない写本独自の本文が、国語研本に見つかることである。^(注10)(14)に例示するように、開合や表記に相違する点があるが、写本素隠抄と国語研本の本文が一致している。(14) a に示される刊本素隠抄・写本素隠抄いずれの本文も、桃源抄(駒大本)には見られない。

(14) a 刊本に「須臾トハ暫時ト云義ソ」と説くに對し、写

本は「縦ヘバダイハフヲ十枚カサネテ一刀ニキル間ノ事ソ」といふたぐひである。

(平泉(一九二六)・368頁)

b 須臾ト云ハ、タトヘハ、ダイホウヲ十枚カサネテ一刀ニキル間ノコトソ。
(国語研本・上・37ウ)

c 須臾トハ暫時^{サツ}ト云義ソ。
(刊本素隠抄・一・40オ)

写本素隠抄にのみ存在する本文には、(14)と異なり、桃源抄を下敷きにしたものもある。当該部分について、駒大本、国語研本、写本素隠抄を比較すると、国語研本は、駒大本よりも写本素隠抄と共通する点が多い。たとえば、(15)に示すように、表記は異なるが、国語研本と写本素隠抄の冒頭では、サルホドニが用いられているのに対し、駒大本にはない。また、駒大本で「サルホトニ」とあるところに、国語研本と写本素隠抄では、「サテ」が用いられている。

(15) a 去程二唐人ノ日本ヘ渡テ日本デセラレタ事ヲ用ル事

ハ、竺化(竺仙カ)和尚大鑑禪師、仏光此三人ヲハ可用ト、慈氏和上ノ御定アツタソ。サテ貞和集ニモ三人ノ頌ガ入タソ。
(平泉(一九二六)・365頁)

b サルホトニ唐人ノ日本ヘ渡テ日本デセラレタコトヲ

用ルコトハ、竺仙和尚、大鑑禪師、仏光、此ノ三人ヲハ可^レ用ト慈氏和尚ノ御定アツタソ。サテ貞和集ニモ三人ノ頌ハ入タソ。(国語研本・上・54ウ)
 唐人ノ日本へ復^{ワタツテ}テ日本テセラレタ事ヲ用事ハ、竺仙和尚、大鑑禪師、仏光師ト此三人ヲハ可用ト、慈氏ノ御定アツタソ。サルホトニ貞和集ニモ三人ノ頌トモハ入タソ。(駒大本・26オ)

国語研本と写本素隠抄との近さが窺え、国語研本は、桃源抄そのものではなく、写本素隠抄といった、桃源抄を基に編まれた別の抄を基に作製された可能性が浮かび上がる。

素隠抄の著者・説心、国語研本の書写者・単伝の師である越伝は、妙心寺派の僧であり、国語研本が書写された乾徳寺も妙心寺派に属する。以上の事実を踏まえると、国語研本は、妙心寺系統の流れをくんだ三体詩抄である可能性が高い。在野の寺院である妙心寺は「林下」と呼ばれ、五山の官寺とは区別される。系統こそ異なるものの、妙心寺派においても、桃源ら五山僧の解釈が受容され、三体詩の抄物が作成されるなかで、国語研本も成立したと考えられる。

四、三、国語研本の独自本文

これまでは、先行抄との共通点を取り上げてきたが、国語研本には、(16)に例示する独自本文も存在する。(16) aは「或説ニ」に始まる別の解釈を提示するものである。(16) bの「双桂」は、惟肖得巖(一三六〇～一四三七)を指し、先行する抄、もしくは、講義からの引用と考えられる。(16) cの「私云」は、抄者、または、書写者の解釈を示す可能性が高い。(16) dに掲げるように、宋代の詩集『淮海掣音』を始めとする書籍の引用も見つかる。

(16) a

或説ニ、底心ハ、天下大道ニアラス。キ、モシラス
 小道ニテ、イツクヘ行モ、我等カヤウナルモノヤ、
 貴方ノヤウナルモノヲハ、人力許容セヌソ。

b

双桂云、長楊ハ、長クウヘナラベタル楊柳マテソ。
 又楊貴妃カ楊氏ノ義ニモトル。(上・34オ、34ウ)

c

私云、帰雁者向北帰雁也。(上・12ウ)
 淮海掣音 卷上、楓橋題云…(上・19オ)

d

ただし、これらが、書写者・単伝によって新たに加えられたものか、国語研本が依拠した抄にすでに存在したものであ

るかについては手がかりがなく、不明とせざるをえない。

四・四・国語研本に関するまとめ

以上、確認した国語研本の本文の特徴は、次のようにまとめることができる。

- ①主として桃源瑞仙の三体詩抄と共通する本文からなり、他の五山僧の講説などが増補されている。
- ②本文や書き入れに刊本素隠抄との関連がうかがえ、現存しない写本素隠抄と共通する本文も見える。桃源抄より写本素隠抄に一致する点が確認できることから、桃源抄そのものではなく、桃源抄を取り込んだ別抄を基に成立したと考えられる。
- ③国語研本は、説心や単伝の師・越伝の属した妙心寺派の流れをくむ三体詩抄である。没年などから推測するに、単伝によって一七世紀後半に書写された可能性が高い。
- ④先行抄の写本と見るべきか、先行抄を基に単伝による増補・改訂を経て、新たに成立した抄と捉えるべきかは決め手を欠く。仮に先行抄の大部分を引き継いだものであったとしても、先行抄の成立は写本素隠抄より後の可能性が高く、一七世紀に入ってからと考えられる。

五・日本語史資料としての国語研本

——桃源抄との比較を通じて——

最後に、これまで明らかにした文献学的成果を基に、国語研本の日本語史資料としての活用例を提示したい。

先に明らかにしたように、国語研本は、かなりの分量の桃源抄を取り込んでいる。しかし、文明（二四六九―一四八七）期の講義に基づく桃源抄と、近世初期写の国語研本との間には時代の隔たりがある。桃源抄が国語研本に組み込まれる際に、表現が改められている部分があり、これらのなかには、中世後期から近世初期にかけて生じた言語変化を反映していると考えられるものがある。

たとえば、桃源抄（駒大本）に見える「タトユル」（2ウ）は、国語研本では「タトエル」（上・5オ）である。近世期に二段活用的一段化が進行した結果を反映したと考えられる。また、駒大本の「寒山寺へサツト行テ」（11ウ）の「サツト」が、国語研本では「ワサト」（上・21ウ）になっている。ワザトは「ほんのちよつと」（『日本国語大辞典（第二版）』、以下『日国』）の意と考えられるが、『日国』における初出例は『野狂集』（二六五〇）である。近世期に生じたとみられる新用法

が、国語研本で用いられていることがわかる。

両本間の相違の中で最も興味深いのは、動詞「ネマル」を巡るものである。駒大本には、五つのネマル（名詞＋デ＋ネマル3例、動詞＋テネマル2例）の例がある。うち3例は国語研本に対応する本文が存するが、(17)に示すように、いずれもリに改められている。

(17)	駒大本	国語研本
a	長廊下ヲ僧タチハシツテ我塔頭ヤ寮舎ヤナトヘ帰リハテ、サシテ人ハ一人モナキ時ニ、李涉カ独立シテ、尽日、門前ニ松ヲウチ看テネマルソ。 (46オ、46ウ)	長廊ヲ下テ僧タチハ、シツ／＼ト我塔頭ヤ寮舎ヘ帰リハテ、人ハ一人モナキ時ニ、李涉カ独立シテ、尽日、門前ニ松ヲウチ看テヲルソ。 (中・7ウ)
b	クワヤスキヤナントヲ把テ、自耕テ百姓太郎トナリハテ、一布衣テネマリタイト云ヘシト云ソ。 (23オ)	鏝ヤ鉄ヤナントヲ把テ、自耕シテ百姓太郎トナリハテ、ヌノコカミツキンナトニテ、一布衣テヲルト答ヘヨソ。 (上・48オ)
c	明——新正ト云イ、故人ニ逢ト云イ、帝ニ目出度、ウレシケレトモ、何モシヨウハ、今夜ノ名残テ、明朝ハ帰ラシモタラハ、門ウチ掩テ、千竿修竹ノウチニハ、只一老身ハカリテネマラウスマテヂヤヨ。 (52オ)	明朝——新正ト云イ、故人ニ逢ト云イ、旁々目出度ク、ウレシケレトモ、何モ支用ハ、今夜一夜ノナコリテ、明朝ハ帰ラシモウタラハ、門ウチ掩テ、千竿修竹ノ中ニ、一老身ハカリテヲラウスマテヂヤヨ。 (中・14ウ、15オ)

また、駒大本が欠く後半部について、集成抄・国立国会図

書館蔵絶句鈔（以下、国会図書館本）の桃源抄の引用と国語研本を比べると、(18)に示すように、桃源抄の引用に見える動詞＋テネマル2例が、国語研本では、同様に、動詞＋テラルになっていることが分かる。

(18)	国会図書館本	国語研本
a	桃云：中略：サテ中ニ居ル時ハ、洞門ヲチ深鎖テ碧窓ノ寒処ニ曉露ヲ滴テ朱ヲスリテ周易ヲ点シテネマル、ホトニ、人ノ不識コソ道理ソ。 (六・105オ、105ウ)	サテ中ニ居ル時ハ、洞門ヲチ深鎖テ碧窓ノ寒処ニ曉露ヲ滴テ朱ヲスリテ、周易ヲ点シテヲルホトニ、人ノ不識コソ道理ヨ。 (下・91オ)
b	桃云：中略：時世ニヨク用ラレハセイト、ヤウ／＼協律郎ニナリテネマリタソ。 (五・110ウ、111オ)	サルホトニ、時世ニヨク用ラレハセイト、ヤウ／＼協律郎ニナリテヲルソ。 (下・8オ)

国語研本には、本動詞を含め、ネマルの使用例はなく、桃源抄で用いられているネマルの使用を一貫して避ける傾向が見て取れる。

抄物資料のネマルについては、山本（二〇二三…一八三…一九九）が詳しい。『四河入海』『史記抄』などの関西系の抄物にまとまった用例があり、本動詞として「座る／＼黙坐」「存在」の二つの意味を持つこと、補助動詞として「結果状態」「反復・習慣」「パーフェクト」というアスペク的な意味を

表すことを明らかにしている。山本（二〇二三）に基づき、(19)に補助動詞の各用法の具体例を示す。

(19) a 是ハ世間ノ小人トモノ時ヲ得レハ、人ヲヲトシテ、サテ祿ニ飽テネマル者ヲ指シテ云ツ。

b サテ坡言ハ我ガ家ニハ竈ノ火タイテフスホリカヘツテ、盆瓶ヲ洗テネマル婦女ノアルマテソ。

c カウ秋来無音ナルカ、ナニタルソト云ヘハ、ハヤ寒茎ヲ抱テ死テネマルソ。

（パーフェクト…四河入海・一一ノ三・30ウ）

山本（二〇二三）は、補助動詞ネマルが表す「状態」の特徴として、テアル・テイル・テラルと異なり、「マイナスニュアンスや卑語の意味合い」を伴う「あまり望ましくないものであることが多」いことも指摘している。先の駒大本の挙例でも、(17) bは百姓を卑下する表現である「百姓太郎」に成り果て、平民の着る「布衣」をまとった状態であることを表す際に、(18) bは厚遇されることなく「協律郎」という身分に留まることを表す際に、ネマルが使われている。

補助動詞ネマルとラルの交替の理由を探るため、駒大本・国語研本のアスペクト形式を確認すると、いずれにおいても、テアル・テイル・テラルが使用されている^{註11}。また、これら三つの形式について、動詞に続く仮名書きの例に限り、駒大本と国語研本の対応関係を調べると、駒大本の使用形式が国語研本でそのまま採用されており、3形式の交替例は存在しない。国語研本において置き換えられているアスペクト形式は、テネマルだけである。

ネマルとラルの交替には、両者の表す卑語の意味が関わっていると考えられる。室町末期から近世初期にかけ、動詞＋ラル、テラルが卑語の意味を獲得したことは、柳田（一九九一・一九二―二三五）、青木（二〇一〇・一六七―一八二）に詳しい。

先に確認したように、補助動詞ラル同様、ネマルも、「マイナスニュアンスや卑語の意味合い」を帯びた用例が多い。ネマルの表す卑語性について注意すべきことは、(21)に示すように、テネマルに尊敬のル・ラルが後接する例があることである。(21)は、仲算と良源が、いきり立って宗論を戦わせている場面で、両僧への敬意を表すために、尊敬のルがテネマルに後接している。

(21) 【引用者注・応和の宗論において高僧・仲算と良源が】両方ツノメ立テネマラレタソ。

(首楞嚴經桃源抄・二・33ウ)

西尾(二〇一五)は、卑語性を伴うマイナス待遇表現形式について、社会的関係性を表す「関係性待遇」と、話し手自らの感情を吐露する「感情性待遇」とを区別している。尊敬のル・ラルと共に起る例があることから、ネマルの表す卑語性は、「関係性待遇」ではなく、「感情性待遇」であると考えられる。

青木(二〇一〇)は、補助動詞「ヨル」の卑語化について、アスペクト形式から感情性待遇を表示する形式への変化を想定する。補助動詞ネマルも、同様の変化をたどり、中世後期に卑語性(感情卑語)を帯びたアスペクト形式として用いられていたと考えられる。

桃源抄(駒大本、国会図書館本の引用)における補助動詞ネマルが国語研本でラルに置き換えられていることは、感情性待遇(感情卑語)を表すネマルの衰退とラルの卑語的意味の獲得を反映したものと解釈できる。

ネマルの卑語性は、山本(二〇二三)が注で指摘するにとどめたためか、ラルの卑語化に比べ注意が払われてこなかっ

た。ネマルはラルに先立ち卑語性を帯びたアスペクト形式として用いられていたと考えられ、中世後期から近世初期にかけて進行したラルの卑語化は、ネマルの後をおそうといった面もあったと推測される。^(注12)

六. おわりに

本稿では、国語研本を取り上げ、その素性を明らかにするとともに、日本語史資料としての活用例を示した。国語研本は、文明期に成立した桃源抄の強い影響下にあり、その本文は、文明期と、書写時である近世初期、両方の言語的特徴がないまぜとなっている。そのため、単独では言語資料として扱いづらく、先行抄と比較し、本文の異同を抑えた上で、利用することが重要である。

具体例として取り上げたネマルとラルの交替については、時代差による変化と捉え、方言差という解釈は取らなかった。書写者と推定した単伝の出生・生育地は明らかにできていないが、方言の反映と認めるべき他の現象が、国語研本に確認できなかったためである。

その一方で、国語研本との関連を指摘した素隠抄には、「素隠自身の講解が濃厚に出ている」律詩の注釈に、「東国方言的

要素が指摘できる」という鈴木（一九八四）の指摘もある。鈴木（一九八四）は、「素隠ゆかりの相模地方」で「かいこかご」を意味する「エガ」（三之一・21才）が用いられていることを明らかにしている。しかし、妙心寺派の抄物に方言的要素がみられるとの指摘は、管見の限り、鈴木（一九八四）の他に例を見ない。

書写地である乾徳寺や、単伝が住職を務めた慈眼寺のある愛知における近世初期のアスペクト形式、国語研本と愛知方言との関連の解明は、今後の課題としたい。

注

注1 二〇一八年一月に受信した国語研図書室からの電子メールに基づく。

注2 国語研のサイトでは、丁数付きでカラー画像が公開されている。画像に付された丁数と本稿で示す丁数は、上巻は一致するが、中巻・下巻は異なる。中巻16表には別紙が付されており、サイトでは、別紙が判読可能な画像を16才、別紙をめぐった同じ丁の画像を17才としている。そのため、中巻の丁数は相違する。また、本稿は墨付きの丁数を示すが、サイトでは遊紙も含めているため、サイトの下巻4才が、本稿の下巻1才となる。

注3 中巻と下巻は、裏見返しの内側に「慈眼常住／三ヶ之内」と記されており、巻末の遊紙だったものが、裏見返しとして利用されたと考えられる。

注4 没年は「享保十三戊申三月七日」（六三〇頁）とする『春日井

市史』に従う。黄檗僧の嗣法の年は、『黄檗文化人名辞典』の「黄檗法系譜」による。

注5 越伝の事績は、『越伝禅师慈眼禅寺語録』の「行由」を基に、『黄檗文化人名辞典』に簡潔に整理されており、あわせて参照した。

注6 旧蔵者とみられる慈眼寺に調査への協力を求めたが、回答を得ることはかなわなかった。

注7 「慈眼寺古記録」は、末尾に「安永三甲午三月 慈眼五代林泉記」とあり、安永三年（一七七四）に林泉如清（宝暦五年「一七五五」嗣法）によって記されたと考えられる。「黄檗法系譜」によれば、単伝から林泉に至る系譜は、単伝元指——鷲山浄極——鏡巖衍輝——林泉如清となる。

注8 慈眼寺再興の経緯を巡り、『尾張洵行記』（文政五年「一八二二」序）「上条入鹿新田」の項には、「越伝天和三亥年四月七日迂化シ、此寺ハ 邦君御一代ノ尊慮ナルヤ、其時終ニ廃寺トナレリ、越伝ノ弟子単伝和尚此地ニ住居セシカ、衆人ノ帰依願望ニヨツテ、宝永六丑年九月知多郡須佐村正覚寺ヲ此地ニ移シ、寺号ヲ譲受、正徳二辰年黄檗派紫金山慈眼寺ト改号シ、宇治万福寺ニ属シ越伝ヲ開山トセリ」と記されている。『尾張洵行記』によれば、正覚寺の当地への移転が宝永六年（二七〇九、慈眼寺への改号は正徳二年（一七二二）となる。

注9 漢詩本文には、他に、「東漸点」（上・12ウ）、「天隠点」（上・12ウ）、「漁庵点」（上・19ウ）、「信仰点」（上・19ウ）、「常庵点」（上・24才）、「勝定国師ノ点并村庵」（上・35ウ）、「桃点」（上・49ウ）、「義堂ノ点」（上・64ウ）、「心田和上点」（中・81才）、「江西点」（上・81ウ）、「九淵点」（中・31才）などの注記がある。東漸健易（東漸）、天隠竜沢（天隠）、南江宗沆（漁庵）、信

注 10

仲以篤(新伸)、常庵竜崇(常庵)、絶海中津(勝定国師)、桃源瑞仙(桃)、義堂周信(義堂)、心田清播(心田和上)、江西竜派(江西)、九淵龍際(九淵)の訓法が参照されていたことが分かる。また、典拠は不明だが、「旧点」(中・33才)、「新点也」(上・84ウ)といった注も見える。

後述する(14a、(15a)の他に、刊本の「無体ナリトテ先師大ニ腹立セラレタゾ」(一・1オ)に対応する写本の本文が、「先師大ニ立腹シテ、ナニモシラヌ土人道チャト云タソ」であることも指摘されている。当該箇所は、『三体詩』の「求名公校正咨目」の注釈であるが、国語研本では、刊本素隠抄(一・1オ)と共通する「是ハ、季昌カ此ノ詩ノ集ヲ註シテ、王公大人及耆旧老成タチニ才名アル人ノ御目ニカケテ、若差誤アラハ、校ヘ正シテ、御ナラシナサレタマワレト云義」(上・1ウ)という一文が見られるのみで、平泉(一九二六)の引用文(刊本・写本)に対応する本文はない。

注 11

いずれも孤例であるが、駒大本には動詞+ヨル、国語研本には動詞+ラルの例がある。

注 12

補助動詞ネマルが卑語化した要因として、山本(二〇二三)はネマルが「俗語であることが関わっているのかもしれない」と、ネマルの俗語性が影響した可能性を挙げている。しかし、ネマルの卑語化のプロセスは、青木(二〇一〇)が補助動詞「ヨル」の卑語化について想定する「文法体系からのみ出し」と捉えた方がよいだろう。テアルやティルといった他形式との張り合いの中で、テネマルが卑語化したと解釈すべきだと考える。

【調査資料】

引用に際し、私に句読点や傍線を加えるなどした。清濁は元のママである。

○人間文化研究機構国立国語研究所蔵絶句抄…国語研のカラー画像(<https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjal/bunken.php?title=zekkyo>)ならびに原本○駒沢大学図書館蔵三体唐詩絶句鈔…駒沢大学電子貴重書庫のカラー画像(<http://repo.komazawa-u.ac.jp/opac/repository/collections/41264/>)ならびに原本○清家文庫蔵三体詩抄…京都大学貴重資料デジタルアーカイブのカラー画像(<https://mdakuih.kyoto-u.ac.jp/item/rb00007981>)○三体詩素隠抄(刊本)…抄物大系(勉誠社)○国立国会図書館蔵絶句鈔…国立国会図書館デジタルコレクションのカラー画像(<https://dlndi.go.jp/infondijp/pid/2606915>)○三体詩塩瀬宗和抄…抄物小系○四河入海…抄物資料集成(清文堂出版)○越伝禅師慈眼禅寺語録…駒沢大学図書館蔵本○首楞嚴経桃源抄…東京大学史料編纂所に所蔵される東福寺霊雲院蔵『蕉了記』の写真帳○尾張洵行記…『名古屋叢書続編 第五巻 尾張洵行記(二)』(名古屋大学教育委員会)○『富岡文庫御蔵書第二回入札目録』…九州大学附属図書館雅俗文庫蔵本○『春日井市史』(春日井市、一九七三年の復刻版による) ※URLは二〇二三年一〇月一〇日最終確認

【参考文献】

青木博史(二〇一〇)『語形成から見た日本語文法史』ひつじ書房
大槻幹郎・加藤正俊・林雪光編(一九八八)『黄檗文化人名辞典』思文閣出版
春日井市教育委員会事務局(一九九八)『木造聖観世音菩薩坐像』『郷土誌かすがこ』五三

鈴木博（一九八四）『室町時代語論考』清文堂出版

谷沢尚一（一九七七）「解説」中田祝夫編『三体詩素隠抄』勉誠社

西尾純二（二〇一五）『マイナスの待遇表現行動——対象を低く悪く扱う表現への規制と配慮——』くろしお出版

芳賀幸四郎（一九六〇）『三条西実隆』吉川弘文館

東春日井郡役所（一九二三）『東春日井郡誌』

平泉澄（一九二六）『我が歴史観』至文堂

古田龍啓（二〇二二）「駒沢大学図書館蔵『三体唐詩絶句鈔』について——桃源瑞仙の三体詩の抄物をめぐって——」『訓点語と訓点資料』一四六

柳田征司（一九九二）『室町時代語資料による基本語詞の研究』武蔵野書院

柳田征司（二〇〇四）「抄物目録稿（原典漢籍集類の部）」『訓点語と訓点資料』一一三

山本佐和子（二〇二三）『抄物の言語と資料——中世室町期の形容詞派生と文法変化——』くろしお出版

付記

本稿は、第二八一回筑紫日本語研究会（令和二年八月一日、オンライン）における口頭発表を基にまとめたものである。発表の席上、その他で、貴重な意見頂いた。また、資料の閲覧・調査において、国立国語研究所を始めとする各所のご高配を賜った。記して御礼申し上げます。

（ふるた たつひろ・九州大学学術研究員）

— 78 —